

# ヤップ島における観光化と伝統文化

—— 比較論的—考察 ——

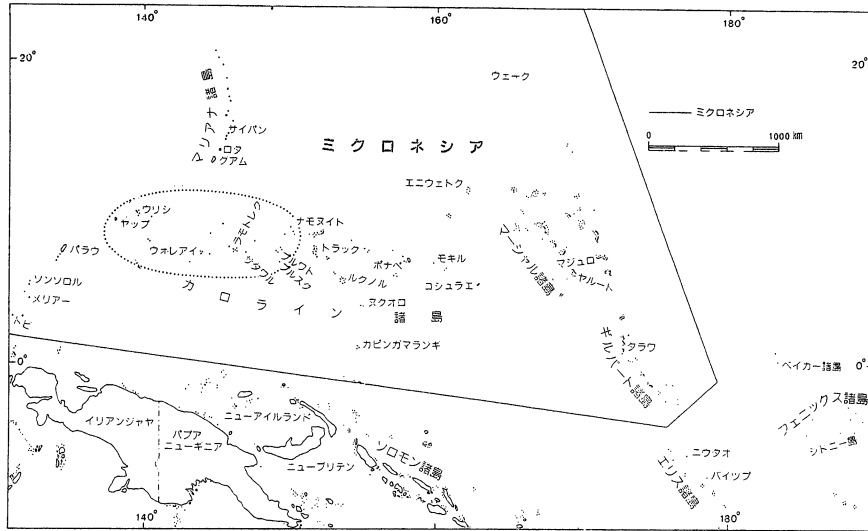
桑 原 季 雄

## 1 はじめに

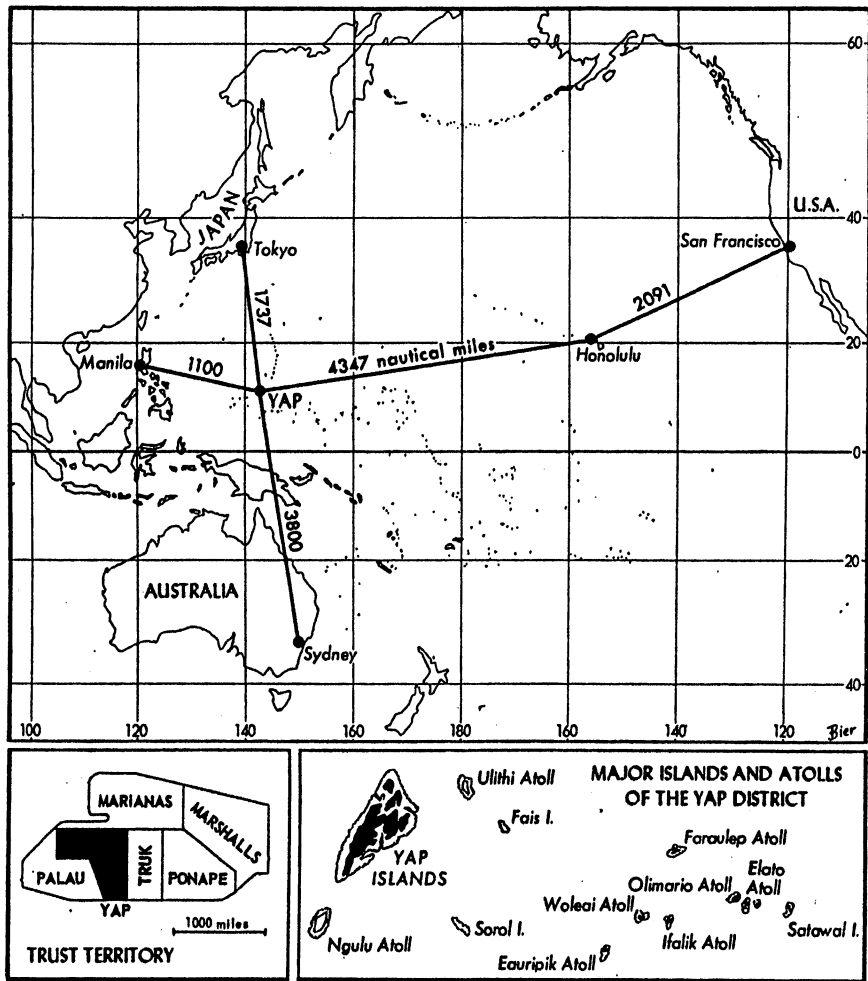
巨大な石貨とダイビングの海で知られるヤップ島は、ポンペイ (Ponape), チューク (Truk), そしてパラオ (Palau) とともにミクロネシア連邦 (FMS) を構成する4州のうちのひとつ、ヤップ州に属する島である。ミクロネシア連邦は、人口約110,000人、面積約700平方キロで、1986年11月にアメリカ合衆国の国連信託統治領から独立し、首都はポンペイ州のパリキールである。ヤップ州はこのミクロネシア連邦の西端に位置し、ヤップ本島部と外島部からなり、外島部には本島部から西の方に向かってウリシー (Ulithi), ファイス (Fais), ウォレアイ (Woleai), イファリク (Ifalik), フララップ (Faraulep), エラート (Elato) などの環礁 (Atoll) と、本島部から最も遠いサタワル (Satawal) 島など約11の環礁と島からなる。また、ヤップ本島部は、ヤップ本島 (Yap Proper) とマップ (Map), ガギルートミル (Gagil-Tomil), ルムン (Rumung) の4島からなり、グアム島の南西約800km, 東京から約3,200km, マニラから約2,000km, ホノルルから約8,000km, そしてシドニーから約7,000kmの距離に位置する (地図1, 地図2参照)。ヤップ本島は、マニラ, パラオ, グアム, チューク, ポンペイの各島や都市とコンチネンタル・ミクロネシア航空によって結ばれている。また、本島部と外島部を結んで、およそ3ヶ月ごとに島々を巡回する定期船が就航している。

ヤップ州の州都はヤップ本島部東岸に位置するコロニア (Colonia) で、州の人口はミクロネシア連邦の人口全体の約10%にあたる11,000人、また、ヤッ

地図1 ミクロネシアとヤップ州



地図2 ヤップ島の位置



(出典：Lingenfelter 1975, p.6)

プ本島部には州人口の62%にあたる約7,000人が住む。ヤップ本島部は10管区と約100の集落からなり、面積は約100平方キロで、これは州の陸地面積全体の84%にあたる。

本稿は、ヤップ島において伝統文化がどのように維持されているのかを、観光化の問題との関連で考察する。これまでの人類学の分野における観光人類学的研究から明らかなことは、伝統文化の再生あるいは維持ということが、例えば観光化といった外部の力を取り込むことによって可能であるということである (Picard 1990, 1996, 山下 1992, 1993, 1996, 1999)。太田によれば、観光現象を考察するための理論的装置として二つのアプローチがある。一つは、自然や社会に対する観光の経済的影響を追求する「経営学的分析」であり、もう一つは、文化や伝統という現地の人々の生活それ自体が、観光対象になることへの批判を込めた「文化の商品化」論的アプローチである。後者の「文化の商品化」論は、さらに、文化が「見せ物」となったため本来の社会的な意味を失い廃退してしまったというバスク地方の事例から、逆にそのことがかえって文化の自己展開を促したというバリ島の文化観光の事例まで、大きく二つに分かれている (太田 1996: 208-209)。本稿では後者の「文化の商品化」論的観点から、ヤップの伝統文化と観光化の関係を探り、ヤップにおいて観光が伝統文化の再生・維持・強化のための外部の力となりえているかどうかを検証する。即ち、バリ島の事例に代表されるような、伝統文化の自律性がある程度観光化という外部の力を借りて行われうるという観光人類学的視点から、ヤップにおける外部の力と伝統文化の再生・維持との関係の考察を試みる。従って、本稿では後半部分で、バリ島の文化観光を一つのモデルにして、ヤップの事例との比較考察を行い、ヤップの特徴を浮き彫りにしようと試みる。そこで、まず最初に、ヤップ社会の伝統文化の実状について、簡単に見ていくことから始めよう。

## 2 ヤップの社会と伝統文化

ヤップの社会や文化の最も大きな特徴は、社会や文化に対する土地の規制力が非常に強く、土地がヤップの文化的イデオムになっていることである。ヤップ社会の基本的な生活単位は「タビナウ」(*tabinaw*)と呼ばれる屋敷地、特に石積みの土台(ダイフ *dayif*)が付属している一区画の土地である。ヤップでは、「土地に力がある」と言われるように、あらゆる屋敷地は格付けされ、各人の保有する土地の位階と年長制に基づいて、政治・宗教的諸職能につく資格と特権が付与されている(Lingenfelter 1975: 92-99)。即ち、その土地のランクに応じて、個人の政治的ランクや宗教的職能があらかじめ決まっているのである。

タビナウはまた、独立した食料資源保有単位でもある。職能と特権を内包している各ダイフには、屋敷地以外の他のプロット、即ち、タロイモ田、ヤムイモなどの畑、漁場、石積みの追い込み(フィッシュ・トラップ)、ヤシノキ、林、山など、あらゆる食料資源領域が一つのセットとして付属している(牛島 1987: 54)。この多様な食糧資源領域の存在がタビナウのメンバーの自給自足を高め、維持しているのである。しかし、近年、ヤップでは多くの集落で人口減少の結果、政治的・宗教的職能や特権ばかりでなく土地も様々な相続様式を通じて数少ない残留者の手に集中してきているのが実情である。

ここで、過去20~30年の間に村がどのように変化したかを、ヤップ島北西部ファニフ(Fanif)管区のラン(Rang)村のインフォーマントの話にそってみたい。まず、目に見える大きな変化の一つは、みんなが服をつけるようになったことである。伝統的なヤップの服装は、男はスュー(*thuw*)と呼ばれるフンドシ、女はラバラバ(*lava lava*)と呼ばれる腰巻きで、両者とも上半身は裸であった。最近ではフンドシや腰巻きだけで出歩く人はほとんど見られなくなった。年輩の人が特別な機会にフンドシをしているくらいである。ただ、現在でも州都コロニアの町では、外島から来た人たちが年齢を問わず、男は青いフンドシ、女は腰巻きだけで歩いているのをみかける。

次に、以前と比べて食生活が大きく変化したことがあげられる。特に若い人

がタロイモよりも米を多く食べるようになったことや、ほかにも、ラーメンや缶詰などの嗜好品が好まれるようになった。また、魚などの生鮮食料品も店で買うことが多くなったという。さらに、昔は、慣行的に、子供は母親と一緒に食事を取り、父親と一緒に食べることはなかった。そして、成人したら親とは別々に食事をとっていた。しかし、現在、子どもたちは父親とも一緒に食べるようになった。また、昔は、一匹の魚でも祖父母、父母、子どもの間で食べる部分が決まっていたが、今はそうしたこともなく、みんなで分け合って食べるようになったという。そしてさらに、昔は畑も、男用の畑と女用の畑は区別されていたが、現在、そのような慣行は崩れてきている。

村の生活での大きな変化は、生活が便利になり良くなってきたことや、また、昔は様々な習慣など難しいことが多くてある意味で大変だったこともあったが、現在は、そういうことも少なくなって楽になってきたという。例えば、昔は、道を歩くときには一列になって歩かなければならなかった。また、ひとりで出歩く時には、木の葉っぱあるいは木の枝などを手にさげて歩き、年輩の人の前を歩く時には腰を低くして歩かなければなかったが、今では、こうした慣行も次第に守られなくなってきた。さらに、子供たちは、かつて、村では、年輩の人たちの静かな生活を乱さぬよう、大声で騒いだりしないで静かに振る舞うよう厳しくしつけられたが<sup>(1)</sup>、今日では、子供たちが村の中でも騒がしいという。また、昔は年輩の人や相手の財産に対して尊敬の態度がみられ、許可なく人の土地へ入ったり物をとったりすることはなかったが、最近では、民主主義のゆえか、年長者や他人の財産に対する尊敬の態度がみられなくなってきたという。

交通の便が格段によくなったこともここ数十年の間の大きな変化である。交通の便がよくなったこととあわせて、町での仕事が増えた。日雇い人夫やコロニアでホテルのボーイ等々、多くの人が賃金をもらって生活するようになった。昔は金がなくても生活できたが、今は何をするにもお金がなければ困ることが多い。しかし、金を持っているからといって村の中で力を持つようになるとは限らないという。また、村の子供たちの中には、留学したり軍人になったりしている人が多く、子供たちからの送金によって、以前に比べるとお金を使う機

会が増えた。テレビは若い人の家にはたいていあり、電話はほぼ全世帯にある。車を所有する世帯も多くなった。

このように、過去20～30年の変化は、食生活やライフスタイルの大きな変化となって現れている。生活が豊かで便利になる一方で、年輩者や相手の財産に対する尊敬の態度が失われつつあることが指摘される。

また、年中行事は現在ほとんど行われなくなったという。メンズハウス (*peebay*) は今でも使われていて、現在でも原則として女性は入れない。かつて、メンズハウス (コミュニティ・ハウスともいう) では、若者たちは大人たちから、やっていいこととやってはいけないこと、例えば、隣村に行く時はきちんと許しを受けて、明るいうちに行かなくてはならず、暗くなってから行っ てはいけないことや、貝貨や石貨のこと、ダンス、建物の作り方、漁業のことなどを習った。今では、若者が少なくなったか、あるいはライフスタイルの変化により、特別な機会を除いてメンズハウスに大人と若者が集って語り合うことも少なくなった。昔は、また、月経小屋 (*dapal*) もあったが、現在は使われていない。

昔と比べて行われなくなった特に重要な行事や儀礼として結婚儀礼がある。昔は結婚の際に貝貨や石貨の交換など様々な交換がともなったが、今はカトリック教会か裁判所で簡単に済ませるだけで、村人全員で祝うこともなく、家族単位で個人の家で祝宴をあげるだけだという。今でも女性の側から女財 (タロイモ、ヤムイモ、石貨1個) が男の側に送られる<sup>(2)</sup>。また、男の側からは男財 (魚、大きな貝貨1個) が女の側に送られる。結婚は、かつては、息子が結婚したい時、恋人をつれて両親の家に泊まり、翌朝父親が息子に問いつめ、意志を確認するとすぐ女の子の家に走って彼女の親ときちんと相談して決めていたというが、現在はこうしたことがなくなってかなり自由で簡単になった。

村人の多くはカトリックを信仰しているが、暗いところや怖いところにいるとされるヤップの土着の神様も信仰されている。また、葬式は儀礼の中で最も盛大な儀礼で、人が病院で亡くなると家に移して通夜をし、その後カトリック方式で土葬にされる。墓の場所を教会の墓地にするか、あるいは村の墓地にす

るかは個人の選択に任されている。埋葬は穴を掘って死体をコンクリートの墓穴の中に安置し、親族の葬式の度に死体を重ねて埋葬する。妻方の親族の葬式には男財を送り、死者を女たちだけで1～4日見守る。また、9の倍数で儀礼を行うともいわれる。

現在、村の行事として行われているものにムル（会食）というのがある。従来は結婚式の時とか、あるいは毎年1～2回行われる程度であったが、現在は数家族が日を決めて一緒に集まってやる。料理は持ち寄りで、家族が全員参加するという。

このように、ヤップでは、村落社会のレベルで見ると、かつての生活と比べてかなり変化してきたとはいえ、今日でもタビナウに象徴される伝統的社会体制の枠組みは根強く保持され、人々の経済生活において、基本的にはこのタビナウという土地保有制度に依存した自給自足的な社会体系が比較的強固に持続している。若い人たちを除けば、村人の食生活は基本的には自前のタロイモとヤムイモ、魚などの伝統的な食生活が維持されている。他方、ヤップ島あるいはヤップ州全体のレベルで見ると、貨幣（商品）経済の著しい浸透により、賃金（月給）に依存した生活の比重が若い人ほど高くなり、米や魚、嗜好品などを買って生活する度合いが大きくなっていて、ヤップの村人の生活の政治的経済的自律性を支えてきた伝統的な自給自足体系が足下から崩れかかっていることがうかがえる。

### 3 伝統文化の復元と継承

ヤップの伝統文化として重要なものに各村や地域のダンスがある。現在ヤップ本島で行われているダンスとしては、ファニフ（Fanif）管区で4つ（女性たちによる Nayer, Talmer, Nguchig, Fagalbitir）、ウェロイ（Weloy）管区で3つ（女性たちによる Talelog, Thol Ngal, Yafis）、ガギル（Gagil）管区で1つ（女性たちによる Tagchal Yimal）、ルル（Rull）管区で3つ（女性たちによる Targosu, Epung, Tiyor）、ルムン（Rumung）管区で2つ（男性による Nugu Fach fach と

女性による Magpafil), カニファイ (Kanifay) 管区で3つ (女性による Mal ni gaa, Mal ni toluk, Mal ni achig) の合計16あるとされる (The Yap Networker 1999.8.6 Vol.1(7))。ダンスは村によっていろいろな目的で踊られ, 観光客への上演という以外に, 若い人たちへの自文化の啓蒙というのもある。毎年3月1日のヤップデーには各管区から儀礼の踊りを出す。また, 国連の日の10月24日は, いくつかの村が集まって踊りの機会をもつ。

ウェロイ (Weloy) 地区のオカウ (Okaw) 村の女性たちは毎週日曜日に一緒に集ってヤップの伝統的ダンスを習っている。ダンスは3つで, そのうちのタレログ (Talelog) と呼ばれるダンスは, これまで村のメンズハウスやコロニアのホテル, そして一度は村で外国の大使の訪問を歓迎して踊られた。他の2つのダンスはともにバンブー・ダンス (竹棒踊り: *gamel'*) である。この2つのバンブー・ダンスは1983年に, オカウ村のメンズハウスのグランド・オープニングに上演するためとして, オカウ村の同盟村であるガギル地区のガチャパル (Gachapar) 村から購入されてきたものである。このダンスと引き換えに, 貝貨 (*yar*) や貝ビーズ (*gaw*), 石貨 (*rai*) その他の贈り物が, ガチャパル村に贈られた。村のすべての女性たちはこのダンスに参加しなくてはならず, もし参加しなければ, 村の活動に参加しなかったということで何らかの罰則が科されるという。罰則には壊れた石畳の小道 (ストーン・パス) の修理, メンズハウス周辺の清掃, 地元の財貨 (*machaf*) の提供, あるいは村の年輩者から命令されたことは何であれ行うことなどが含まれている。このように, オカウ村に生まれたか, あるいは婚入してきたすべての女性たちが伝統によってダンスと村の様々な活動に参加することが義務づけられている。このダンスの練習の目的は, 子供たちに自分たちの文化を学ぶことや自分たちの文化に対する誇りを教えたいからであるとされる。ヤップ人にとってヤップのダンスを習うことは, 自分たちがいったい何者であるか, 即ち, 自分たちのアイデンティティについていかに関心があるかを示す一つのユニークな文化的方法であるという (*ibid.*)。今日のヤップ人は, 現在の変化の時代に, 自分たちの文化のユニーク性について認識したり評価したりし始めているようだ。



